

【活動報告】

令和6年度東京都公文書館夏企画展 「伊豆諸島 ～歴史・文化、そして今」

東京都公文書館 史料編さん担当

西木 浩一

はじめに

東京都公文書館は、その名の通り都の公文書及び都の前身である東京府・東京市が蓄積してきた歴史的資料を保存し利用に供する機関である。しかし、その源流の一つが明治後半期に開始された東京市の市史編さん事業にあることから、当時の東京市域、すなわち旧江戸市街地を対象とした編さん事業、普及事業に偏ってきたといううらみがあった。

令和2年（2020）、国分寺市泉町への移転オープンが、1世紀を超えて継続してきた『東京市史稿』の刊行終了の時期と重なったこともあり、当館では新天地での事業の中で、これまで相対的に取り上げる機会の少なかった多摩地域・島しょ地域を積極的に盛り込んだ企画を立てる方針を定めた。

その反映の一つが、『東京市史稿』に代わる新たな編さん刊行物のシリーズである『東京都公文書館資料叢書』の第1巻として「明治初年の伊豆諸島」を刊行したことであり、この刊行を記念し、夏企画展に標記のタイトルで取り組むことであった。

館の方針・戦略に沿うといっても一朝一夕で島しょ地域に焦点を当てた出版、展示が可能となるわけではない。実は、島しょ地域に関する豊かな資料、公文書が長い年月をかけて蓄積され、整理されてきた歴史が存在するのである。本展示は、このような島しょ地域アーカイブズの来歴と内容をご紹介します場として、次のような3章立ての構成をとって企画された。

第1章 江戸時代の伊豆諸島

第2章 明治初年の伊豆諸島

第3章 航路の拡充と観光ブーム

以下、この構成に沿う形で展示内容を紹介したい。

1 江戸時代の伊豆諸島

江戸時代、伊豆諸島は幕府の直轄領となり葦山代官の支配下となっていた。流刑の地として知られた島々は、また江戸向けの商品生産地としても江戸とのつながりが密接になり、さらに18世紀後半以降は海防という観点からの関心も高まっていった。

代官支配といっても、通常は在任中に1度自身が島に赴くか、手代その他の者に巡見を命じる程度のことであり、実際の支配には在島の地役人らが大きな役割を果たしていた。このような支配形態のあり方は、巡見に向かった役人や同行者が特徴ある島しょの風俗・文化に

関心を寄せ、在地の役人らが文章や絵図などの形で情報を提供するという関係性の中で、ある種の比較文化論ともいえるべき地誌を成立させていった。第1章ではまずこうした地誌の紹介からスタートした。

（1）「七島巡見志」¹・「伊豆海島風土記」²

天明元年（1781）、幕府の命を受けて伊豆諸島の巡見にあたった幕府御普請役佐藤行信、伊豆代官手代の吉川秀道が残した記録。七島巡見志は島の地役人らから提出された書上などが中心で、代官への復命報告書の性格が強い。伊豆海島風土記の方は後の考証も加え、豊富な彩色図も盛り込まれており、地誌としての完成度が高くなっている。

後者における伊豆諸島の植生や動物に関するスケッチと、そこに添えられた説明はきわめて重要である。

たとえば御蔵島などに生息したカツオドリは魚のカツオに似た味わいを賞味するとともに、肉醬として保存されたという。また、マダミという木は、①造船用途の材木、②皮を煎じて八丈島特産絹織物の染色素材、③実を搗いて麦粉と混ぜて食糧として利活用されていた。このように伊豆の島々では限られた資源を有効に活用する生活文化が育まれており、この地誌はその内容を記録として今に伝えている。



「伊豆海島風土記」六（請求番号：DD-045）

（2）七島日記³

寛政8年（1796）、代官三河口太忠は伊豆諸島の巡見を行ったが、この時に同行した文人小寺応斎が残した、多くの絵画記録を含む資料が七島日記である。

文化9年（1812）、三河口太忠は資を投じてこの書を出版、その後、文政7年（1824）、当時江戸文人の中心人物であった亀田鵬斎の序文を加えて再度刊行されている。

小寺は島の生産や習俗に関心を寄せ、八丈島での糸と織物の生産、女性の衣服や冠り物、盆踊りや牛合わせといった盆の行事などを詳しく紹介している。また、難破して遭難死した者が磯餓鬼となって現れ、これを船乗りたちは自宅で飯を炊き、薪を置いてもてなしたとい



七島日記 巻三（左）盆踊り（右）磯餓鬼（請求番号：DD-047-2）

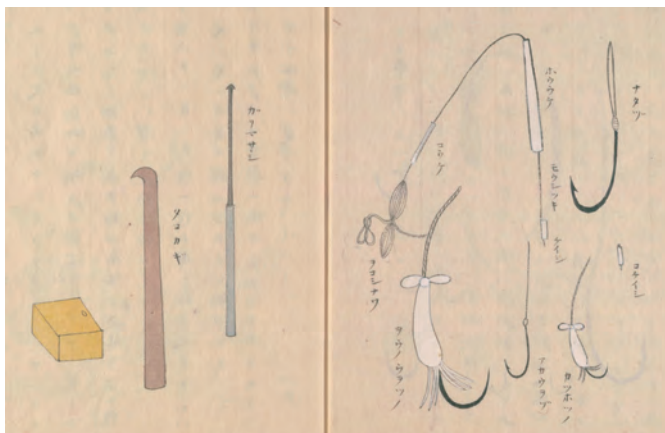
う大島の伝承を聞き、その話からイメージ図を描いている。小寺が在島中、島の人々からさまざまな聞き取り調査を行っていた様相が浮かび上がってくる。

こうした、代官や幕府役人による巡見・視察を契機として生まれた地誌の他に、島へ流罪となった人物、すなわち長期滞在者による詳細な記録が存在している。

（3）八丈誌⁴

寛政元年（1789）、飛騨郡代を勤めていた大原正純は勤め向きに不届きがあり遠島に処された。幼少であった子の正矩は元服後14歳の時、願って八丈島に渡り、赦免になるまでの約10年を父に寄り添って過ごした。この間の見聞にもとづき、八丈島の自然と生活風俗を詳細に描いたのが本書である。上・中・下の3巻からなるが、当館所蔵本は中と下を合綴しており、2冊となっている。

長い時間をかけての生活体験に根ざした具体的記述が特徴的で、たとえば島の人々の方言やイントネーション等にも言及がある。一例として、「ラリルレロ」が「ダヂヅデド」にな



八丈誌中・下（請求番号：DD-057）

りやすいとし、流人が「ジニン」、乱心が「ダンシン」のような具体例を挙げている。

八丈島で過ごす時間の多くを釣りに費やしていたという正矩は、八丈島で用いられていた釣り針や漁猟道具について図を示して詳細な解説を付している。

短期集中の巡見型調査とは異なる、実際に島に暮らした武士の目でとらえた地誌として重要な意味をもった著作といえる。

（4）八丈実記⁵

北方探検で名高い幕臣、近藤重蔵の長男である富蔵は、文政9年（1826）に隣家住人を殺傷し、その罪で翌年八丈島への遠島を仰せ付けられた。文筆にすぐれた富蔵は島に渡ると、八丈島をはじめとする島しょ地域の歴史・風俗・習慣を調査し、その集大成とも言える書『八丈実記』をまとめた。

近藤富蔵は明治13年（1880）に赦免となり、東京に住んでいた娘の戸籍に入っている。近代戸籍制度の開始時に流罪となっていた彼には戸籍がなかったのである。その後、父の墓に参るなどしたものの、翌々年には自ら再び八丈島に戻り、明治20年に島で没している。この年、東京府は『八丈実記』のうち29冊を買い上げた。そこには、富蔵が書き継いだ『八丈実記』本編に加えて、明治以降の記録類も一部混入していた。東京府ではのちにこれらの冊子を再編綴しており、現在は全36冊となっている。

（5）流人アーカイブズ

伊豆諸島に関する近世の地誌類として以上の4編を取り上げた後、第1章の最後に流人アーカイブズを紹介した⁶。

徳川政権のもと法制度の整備に伴い、伊豆諸島が流刑地として位置づけられた。寛政8年（1796）になると、流刑地が八丈島・三宅島・新島に限定される。島に常駐しない代官や手代の下、島出身の地役人や村役人らによって流人の管理は徹底して行われていた。江戸・三

宅島（中継地）・八丈島において、文書をもって流人の管理・引き渡しがなされ、それに伴って膨大な文書が作成・授受・保存されていたのである。

今回の企画展では、八丈誌の著者大原陶太郎正矩、『八丈実記』の著者近藤富蔵に加えて、多摩を代表する侠客、小金井小次郎の記録を紹介した。

2 明治初年の伊豆諸島

慶応4年（1868）4月14日、江戸幕府の代官江川太郎左衛門英武は、旧領地である武蔵・相模・伊豆および伊豆諸島の統治を許され、翌明治2年7月19日に葦山県権知事に任じられた。明治4年（1871）11月14日、葦山県は足柄県へ編入され、伊豆諸島も同県へ引き継がれる。さらに、同9年4月18日、足柄県の解体により、伊豆国および伊豆諸島は静岡県に移管されることとなった。伊豆諸島は管轄県のめまぐるしい変遷を経て、明治11年1月11日、静岡県から東京府へ移管される。この結果、東京府には、静岡県及び足柄県時代に作成された伊豆諸島に係る公文書が引き継がれた⁷。

企画展第2章では、東京府に移管された明治初年の伊豆諸島関連公文書を①巡島記録、②大概記録（明細帳）に類型化して展示し、その他の東京府文書によって東京府への移管関連記録を紹介した。

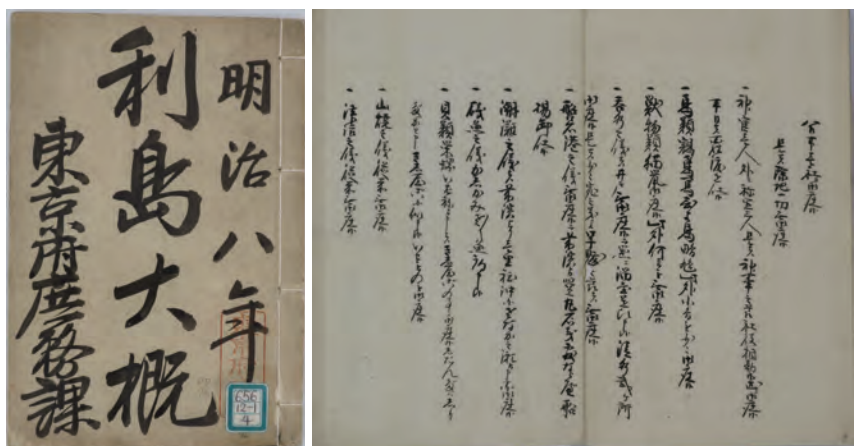
（1）巡島記録

明治7年（1874）6月、足柄県知事柏木忠俊は権大属石原重庸・権少属開田邦光に対し伊豆諸島への巡島を命じ、島々の戸数や人口、自然、産業、風俗・文化に関する調査を行なった。石原・開田は11月2日に江戸霊巖島を出帆、4日に新島に上陸する。すると早速戸長に対して「島々明細帳取調方頭書之覚」を提示し、その項目に沿った明細帳（大概帳）の作成・提出を命じている。悪天候に悩まされながらも、翌年2月にかけてこのような形で順次島々を巡り、大島・利島・新島・御蔵島・三宅島の五つの島についての調査を完了する。明治に入って初めて行われた本格的な島々の調査については詳細な日誌⁸が残され、具体的な様相を今に伝えている。

（2）大概記録（明細帳）

各島から提出された田畑反別・貢税高・産物・生産技術などに関する記録は、明治8年（1875）東京府庶務課によってまとめられる⁹。明治初年における伊豆諸島の実態と島ごとの特徴を知る上でかけがえのない史料ということができる。

また、この時期の巡島調査に伴い、各島からは絵図



『明治8年 利島大概』（請求番号：DD-076）

も作成・提出されている。そこには村名・寺社名のみならず、山や川、沢、入り江などの地名が記され、当時の地理的な景観や島民の生活圏などを視覚的に確認することができる。企画展では、スペースの関係上1点のみ絵図原本を展示し、その他はすべてエントランホール



神津島之図 伊豆七島ノ五
明治8年（1875）10月
（請求番号：ZE010）

（研修室壁面）に印刷物として掲示したが、近くに寄って目を凝らして観覧される方が多かった。

明治7年から8年にかけての足柄県による巡島調査は天候に阻まれ、黒潮を渡る八丈島には至ることができなかった。伊豆諸島が東京府に移管された明治11年になると早速東京府による調査が実施され、同年3月には伊豆七島記がまとめられた¹⁰。

本書には島の村名・耕地の反別、租税高・産物などに加えて、島民の人柄や、男女別の頭髪・服装の特徴、言語なども

詳しく記録されており、展示では表にして島々の比較ができるようにした。ここでは、紙幅の関係もありその一部を掲載しておきたい。

伊豆諸島反別・租税・物産調査一覧 東京府庶務課

地域	村 名	反 別	租 税	物 産
大 島	新島・岡田・泉津・波浮港・差木地・野増	89 町 6 反 7 畝 15 歩	25 円 56 銭 6 厘	炭・薪・夜叉（附子）・鯉節・椿・椎実・椎茸・乾鯉・乾鯖・乾鰯・鰯・鰯・天草・鼠鮫・鱈・杉板
利 島	利島	7 町 5 反 4 畝 24 歩	1 円 60 銭 5 厘	椿油・乾鰯・柘・炭
新 島	新島・若郷	78 町 7 反 3 畝 10 歩	17 円 60 銭 5 厘	鯉節・鯉・鰯・鯖節・海草・乾魚・椿油・夜叉附子・椎実・甲化石
神津島	神津島	23 町 3 反 7 畝 10 歩	7 円 44 銭 4 厘	生鯉・海草・鯉節・干物・椿油
三宅島	神着・伊豆・伊ヶ谷・阿古・坪田	26 町 7 反 1 畝 5 歩	27 円 77 銭 3 厘	綿紬・モノシ・木綿綿・椎実・薪炭・木耳・桑材・椿油・黄楊・鯉・鯉節・乾魚・飛魚・心太草・鶏冠草・牛骨・牛皮・麦・粟・芋・薩摩芋・塩
御蔵島	御蔵島	5 町 1 反 6 畝 3 歩		
八丈島	末吉・中之郷・檜立・大賀郷・三根	339 町 9 反 1 畝	黄紬 531 反 1 分 5 厘 口紬 22 円 14 銭 8 厘	綾丹後・合糸織・丹後綿・鳶色紬・白紬・鯉節・心太草・木耳・布海苔・亀甲・蒲筵・糸籠・牛皮・薪

3 航路の拡充と観光ブーム

豊かな自然と文化、その中で育まれた海の幸、山の幸、特産品の数々が人気を集める観光スポットとしての伊豆諸島。しかし、ここに至るには定期的に運行される航路の拡充が不可欠であった。第3章では島々への交通を支えてきた航路や空路の発展過程を追いながら、昭和戦前期に大ブームを巻き起こした大島のような、そして高度経済成長期に離島ブームの中心となった伊豆諸島への旅の様相を紹介した。

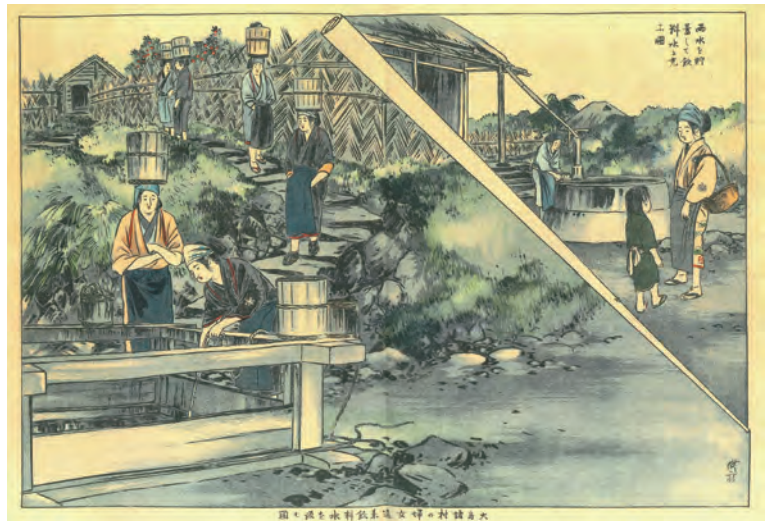
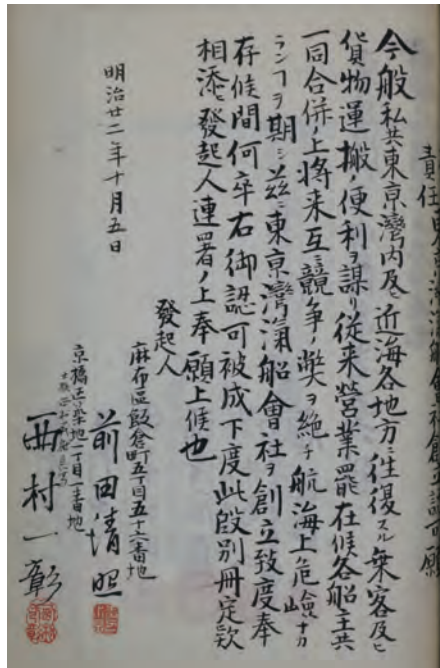
（1）定期航路の始まり

伊豆諸島への定期便の就航は、明治政府が日本郵船株式会社に命じて、横浜～小笠原島へ

※本報告書の著作権は東京都にあります。「私的使用のための複製」や「引用」など著作権法上認められた場合を除き、無断で複製・転用することはできません。

就航させていた船舶が三宅島・八丈島に立ち寄る形で始まった。明治22年（1889）11月、東京湾汽船株式会社（現・東海汽船株式会社）が創立されると¹¹、伊豆諸島の他の島々への就航便も増加していく。そして明治40年（1907）、東京府と同社の間で伊豆諸島定期公開に関する契約が締結され、東京府の補助を受けた4航路が開かれ、翌年には、八丈島への航路も郵便物輸送の命令航路として開かれた。

定期的な通航が可能となる中で、明治35年（1902）5月、東京地学協会が提唱して、一般参加者を募って伊豆諸島への探検を試行、人々の注目を集めることとなった。わが国初のグラフィック雑誌『風俗画報』は早速これに呼応して、臨時増刊『伊豆七島図会』を刊行、伊豆諸島への関心を高めることとなった。



（左）東京湾汽船株式会社創立認可願
（右）大島諸島の婦女遠来飲料水を汲む図／
雨水を貯蓄して飲料
『風俗画報増刊 伊豆七島図会』（1902年、東陽堂）

（2）大島ブームの到来

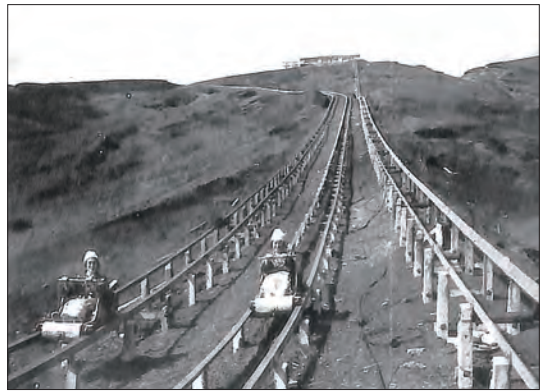
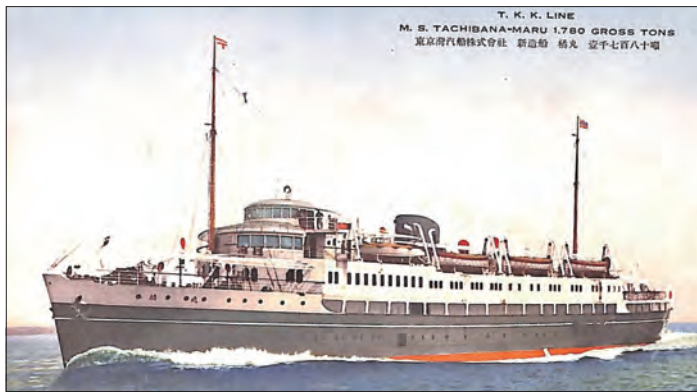
大正7年（1918）に裕仁親王（のちの昭和天皇）が大島に行啓して島への関心が高まる中、昭和初年には大島への日航便の運用が開始され、さらに豪華な客船が続々投入されるなど、大島への旅を支える基盤が整備されていった。昭和3年（1928）には歌謡曲「波浮の港」が空前の大ヒット、同7年には読売新聞と東京湾汽船がタイアップして三原山火口探検が行われるなど、自然と異国情緒溢れる大島への旅は大きなブームとなったのである。

このコーナーには東海汽船株式会社の社史を参考とし同社のアーカイブズを借用することで、当時の大島観光を豊富な写真とともに紹介することができた。また、三原山にラクダとロバを輸入してエキゾチックな魅力を演出する際、横浜港に到着したラクダ3頭とロバ11頭が京浜国道を行進するデモンストレーションを行っていた事実を示す記録¹²など、企業アーカイブズの魅力を紹介することとなった。

このような魅力あふれる大島観光ブームは戦時色の強まりの中で縮小し、戦局の悪化によって終焉を迎えることとなった。

（3）離島ブームの先駆け

戦後、昭和28年（1953）に離島振興法が制定されると、伊豆諸島においても交通施設・通信施設・観光開発などの基盤整備が進められた。東京都も伊豆諸島の観光開発基盤の整備



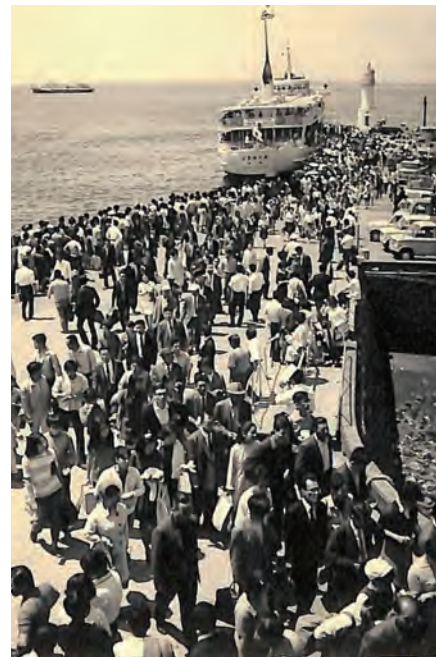
（左）昭和10年（1935）大島航路に就航した橋丸（絵はがき）（右）三原山滑走台（スライダー）
東海汽船株式会社提供

について方向性を示し港湾施設・空港・島内交通網の整備等に取り組んでいった¹³。

こうした中、1960年代の半ばから離島ブームが巻き起こり、伊豆諸島はその先駆けとなった。その特徴は、若者層を中心としたキャンプやサーフィンなどのマリンスポーツ、サイクリングなどが盛んになったこと、民宿を利用した比較的簡便な宿が好まれ広がったこと、大島以外の島々にも観光客が多数訪れたことが挙げられる。

ここでも、東海汽船株式会社から当時のパンフレットなどを借用・展示した。東京都もまた観光振興のための情報発信を行っていたが、たとえばパンフレットに記載された宿泊施設数などは、今となっては貴重な歴史資料ということができよう。

離島ブーム期の大島（元町桟橋）
東海汽船株式会社提供



◆ 宿泊施設（昭和45年6月1日現在）

施設別 島別	旅 館		民 宿		バンガロー		キ ャ ン プ 場	
	施設数	収容人員	施設数	収容人員	施設数	収容人員	施設数	収容人員
大 島	69人	2,226人	67人	1,406人	8棟 大島公園	24人	6ヵ所 黒潮、トーシキ、 弘法浜、砂の浜、 岸田、秋の浜	1,650人
利 島	1	13	0	0	0	0	0	0
新 島	8	170	109	1,450	20 間々下海岸	60	1 和田 浜	2,000
式根島	3	56	81	999	0	0	2 石白川・大 浦	450
神津島	5	121	123	1,842	5 多 幸	20	3 多幸湾・ 沢尻湾・長浜湾	1,740
三宅島	18	472	76	1,164	0	0	3 大久保・ 三 池・錯々浜	1,500
御蔵島	2	18	0	0	0	0	0	0
八丈島	17	1,052	51	923	68 底土・大里	252	4 大里・浜遊 第1・2(底土)・ 浜遊第3(末吉)	720

サイクリング（式根島）：『東京の名所・旧跡（伊豆諸島、小笠原諸島）』1980年、東京都総務局渉外観光部）
宿泊施設一覧：東京都パンフレット「東京の島じま」『伊豆七島－大島・利島・式根島・神津島・三宅島・御蔵島・八丈島－関係（パンフレット）』（総務 E300）

むすびにかえて

企画展の概要を紹介してきた本稿のむすびにかえて、関連するイベントについて触れておきたい。

まず、8月26日、当館研修室を会場として企画展関連講座を開催した。当館職員による「記録にみる伊豆諸島の自然と人々の生活」に続いて、伊豆諸島の魅力を撮影し発信されている写真家の田辺久弥氏に「Tokyo Garden Islands ～写真家が見る島の魅力」と題してお話いただいた。展示の中では伊豆諸島の「今」について十分に触れることができなかった。これを補う意味でも、今回の講演会では歴史的アプローチによらずに、新たな視角から島々の魅力をご紹介いただきたいという趣旨でお願いしたものであった。美しい作品を次々にご紹介いただき、私たちの企画意図は十分に達成できたと感じる場となった。

また、この企画展は夏休み期間を含むということもあり、近隣の方を中心にお子様連れで



魚釣りコーナー

立ち寄っていただける企画を立てた。それが、当館所蔵資料をコピーして工作した魚たちを釣っていただくコーナーであった。釣れた魚については、近くに置いてある「図鑑」で確認していただくこともでき、ここでも記録資料に身近に触れていただく体験を提供することができた。企画展と合わせて、公文書館の堅苦しさ、入館しにくい雰囲気払拭する取り組みは今後とも工夫を凝らして継続していきたい。

- 『七島巡見志』16巻、8冊（請求番号：DD-048～DD-055）
- 『伊豆海島風土記』6冊（請求番号：DD-040～DD-045）
- 『七島日記』3冊（請求番号：DD-046, 047, 047-2）
- 『八丈誌』上（請求番号：DD-056）、『八丈誌』中・下（請求番号：DD-057）
- 『八丈実記』36冊（請求番号：DD-001～DD-036）
- 当館所蔵の流人アーカイブズについては次の文献においてアーカイブズ学的な検討が行われている。工藤航平「八丈島流人アーカイブズの概要調査報告ー都有形文化財「八丈民政資料」の伝来と構造ー」『東京都公文書館 調査研究年報 WEB版 研究紀要』第5号、2019年
- 移管された伊豆諸島に関連する公文書の内容と特質については、高木謙一「解題」『東京都公文書館資料叢書 第1巻 明治初年の伊豆諸島』（2024年、東京都公文書館）に詳しい。
- 『明治7年（1874）伊豆各島巡回日誌（静岡県引継）』（請求番号：DD-082）
- 『明治8年（1875）大島明細 東京府庶務課』（請求番号：DD-075）、『明治8年（1875）利島大概 東京府庶務課』（請求番号：DD-076）、『明治8年（1875）新島明細帳（静岡県引継）』（請求番号：DD-077）、『明治8年（1875）御蔵島大概 東京府庶務課』（請求番号：DD-074）、『明治8年（1875）三宅島大概 東京府庶務課』（請求番号：DD-080）
- 『明治11年（1878）伊豆七島記 東京府庶務課』（請求番号：DD-071）
- 「有限責任東京湾汽船株式会社創立認可願」『願伺届録・会社規則・第4巻』（請求番号：617.D2.14）
- 『三多摩および伊豆七島観光開発計画答申書』1956年、東京都観光事業振興会、（請求番号：総務E 179）、【庁議】昭和35年度離島振興計画（請求番号：328-B6-01）
- ラクダの輸入、大島への搬送、現地での飼育、治療などに当たるため、東京湾汽船株式会社には「駱駝部」が組織された。1931年から1940年に至るその業務の詳細を記した『駱駝部日誌抄録』を借用し展示することができた。

※本報告書の著作権は東京都にあります。「私的使用のための複製」や「引用」など著作権法上認められた場合を除き、無断で複製・転用することはできません。